

リポート
Report

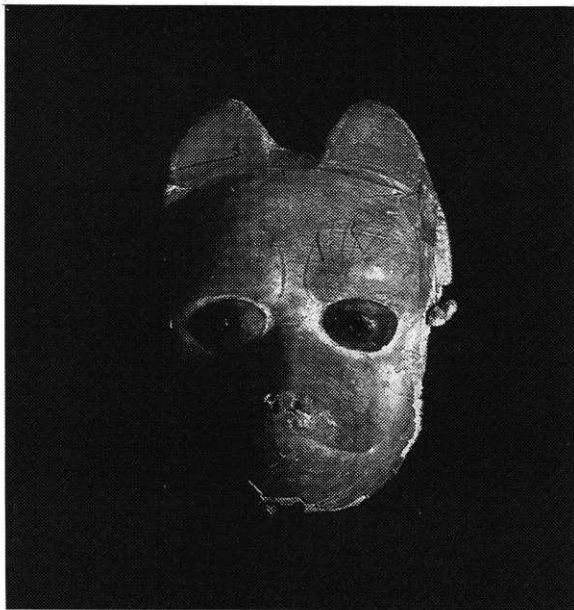
大磯町郷土資料館だより

1991・9・15

2

もくじ

- | | |
|-----------------------|---|
| ◇古代の餘線② | 2 |
| ◇遺跡展望～大磯小学校遺跡 | 4 |
| ◇藤村の見た左義長 | 6 |
| ◇トピックス / 行事案内 / 資料の受入 | 8 |



〈館蔵品にみる〉

古代の餘綾(2)

日本の国土は、長い時間に渡って降り積もった、火山灰から形成される酸性土壌である。そのため石灰分の強い土壌や低湿地などの例外を除けば、当時の人々が生活していた場所に残された遺物は、その多くが土へと還ってしまう。たまたま運良く残されたわずかな遺物を、今日、我々は調査によって手にすることができる。従って調査によって得られる遺物は、当時の生活用品のごく一部であり、その背後に様々なものが隠されていることを忘れてはいけない。今回はそのようにして運良く残った、良好な鉄製品を紹介する。

馬場台遺跡出土のU字形クワ・スキ先

馬場台遺跡を含む国府本郷・馬場周辺は、相模国府の所在した一帯とされており、20次を越える調査によって石帯・銅印・緑釉陶器など官衙を連想させるような遺物が出土しているが、官衙特有のコの字配列の掘立柱建物址や木簡・墨書土器など完全な決め手となる遺構・遺物に欠ける。また相模国府=餘綾国府の年代は1150年頃以降であり、考古学的にも12世紀代の西相模地域は、未だ解明されていない点が多いため、出土遺物の検討とともに多くの問題を抱えている。

さて今回紹介するU字形クワ・スキ先は、馬場台遺跡20地点の調査で出土した。調査地は、遺跡のベースとなる土壌が海岸砂であることに加え、遺構間の切り合い関係が激しい上、道路幅の調査であったため、遺構の遺存状態は必ずしも良好ではなかった。そのためU字形クワ・スキ先の出土した遺構は、祭祀を伴う配石状の遺構であると思われるが、遺構の形態・規模な

東海大学文学部助手 田尾 誠 敏

ど細部についてはなお不明点が多い。このU字形クワ・スキ先に共伴して、土師器の羽釜・台付鉢がまとまったかたちで出土しており、付近に鉄滓も散在していた。特に台付鉢は他に類似を見ない形態のもので、2個体1組で据えられていたと思われる。

出土したU字形クワ・スキ先は、刃幅21.8cm・長さ18.8cmを測る、きれいなU字形を呈するクワ・スキ先である。遺存状態は良好で、欠損部が少ない。そもそもU字形クワ・スキ先とは、木製の台木(柄)に装着する鉄製の刃先のことである。日本における獣・鶴の区別は中国のそれと逆だということであるが、松井和幸氏も述べているように、古代の獣先・鶴先の区別は刃先の形態のみからは困難であるため、ここでは都出比呂志氏の言うようにカクカナでU字形クワ・スキ先と表現しておく。

U字形クワ・スキ先は、畿内以西では鉄製打ちクワに代わって5世紀中葉に出現するという。また関東地方においては、遅れること半世紀、6世紀の初頭にその初例が求められるということである。今回紹介のU字形クワ・スキ先は、刃先が大きくU字形にカーブを描くものであり、土井義夫氏によるb類に属する。土井氏によるとb類は、8世紀頃にその普及が始まったとされ、国分期(平安時代)になるとa類(凹形のもの)とともに若干出土例が増加するとされている。本例は、遺構に伴って緑釉陶器片や、先ほど述べたように羽釜を伴っている点などからも、平安時代でも後期に属する資料であろう。

また本例は、各氏が集めた類似と比較しても大型



図1 U字形クワ・スキ先出土状況

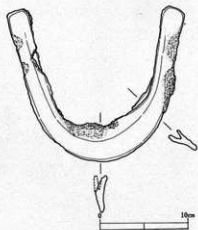


図2 U字形クワ・スキ先実測図

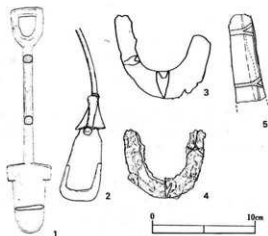


図3 U字形クワ・スキ先の柄と畠内の類例

①奈良県平城京、②滋賀県針江中遺跡、③厚木市巻尾遺跡、④相模原市相原ノ上遺跡、⑤平塚市向原遺跡、松井論文・報告書より)

の部類に属し、これだけの遺存状況を示す大型のU字形クワ・スキ先の出土例は、畠内で類を見ない。畠内出土例では厚木市巻尾遺跡例が著名であるが、他に相模原市相原ノ上遺跡・鎌倉市手広八反目遺跡出土例がある。その他の遺跡での出土例は、管見に触れた限りでは断片がほとんどである。a類である手広八反目遺跡例を除く、これら2遺跡の出土例は、刃幅・長さともに10cm以下の小型のもので、破片ではあるが平塚市向原遺跡出土例が大型になるものと思われる。従ってb類で大型のものでは、現在のところ畠内で最も遺存状態の良好な例であると思われる。

8世紀頃になると、それ以降に用いられている鉄製品の、ほとんどの種類が出土した観があるとされている。畠内における集落出土の鉄製品のうち、農具として最も多く出土するものとして鉄鎌があり、また半月形穂摘具なども散見される。その他の鉄製品は、鉄斧・鉄鎌車・刀子などがよく出土するが、錆びて朽ち果ててしまったものと考えても、U字形クワ・スキ先の出土例は極端に少ない。住居址軒数184軒を誇る平塚市向原遺跡においても、U字形クワ・スキ先の出土は先に挙げた1例のみに留まり、国府関連遺跡である平塚市四之宮下郷遺跡においては出土例がない。このことは関東全域に置き換えても言えることで、土井氏はこの意味について、8・9世紀の一般農民は開墾・耕作具としてのクワ・スキ先の私的所有を実現しておらず、ようやく収穫具である鎌などの私有が成されたところであるとし、クワ・スキ先の流通を掌握したのは有力家父長であったであろうと締めくくっている。

ともあれ、本遺跡出土例を特徴づけることは、第1に祭祀関連遺構出土であろうということ、そして従来より国府域と想定されている地域の出土だということであろう。遺構の時期からすると、相模国府が大住郡からこの餘綾郡に遷された多少以前であると大住郡からこの地に居住した有力氏族の私的な、あるいは郡衙クラスの公的な祭祀が行われた名残であるのかもしれない。

引用・参考文献

- 相原田ノ上遺跡発掘調査団 1980 『相原田ノ上遺跡』
大磯町教育委員会 1991 『大磯町における発掘調査の記録Ⅰ』
神奈川県教育委員会 1975 『巻尾遺跡』
1982 『向原遺跡』第3分冊
木下 良 1974 『相模国府の所在について』『人文研究』No.59 神奈川大学人文学会
都出比呂志 1967 『農具鉄器化の二つの画期』『考古学研究』第13巻第3号
手広遺跡発掘調査団 1984 『手広八反目遺跡発掘調査報告書』
土井 義夫 1971 『関東地方における住居址出土の鉄製農具について』『物質文化』18
1981 『鉄製農具研究ノート』『どるめん』No.10
松井 和幸 1987 『日本古代の鉄製農具、鋤先について』『考古学雑誌』第72巻第3号

【表紙写真】

狐面 (西小磯高砂組小(子)供連中)

西小磯に伝わる七夕は、盆を迎えるにあたって村内を洗い浄める行事として位置付けられている。8月6日、竹筒りを手に集まった子供たちは村内の神社、道祖神、井戸、辻などの場所を洗い浄めながら巡り、また、狐や狼、オカメ、ヒヨットコなど獅子の面を付けて踊りながら各家を門付(カドつけ)して歩く。これらの行事には「小供連」と呼ばれる子供組が組織されており、行事は組単位におこなわれる。なお、持ち寄った竹筒りは束ねて竹神輿がつくられる。そして再び村内を巡った後、穢れを背負い込んだ竹神輿は7日早朝に漕入派されるのである。

遺跡展望 ～大磯小学校遺跡～

JR東海道線大磯駅の西側一帯に展開する大磯小学校遺跡はその名前の示すとおり、大磯町立大磯小学校敷地内を中心とする東西150m、南北250mの縄文～奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。

学校周辺は民家が密集しており、遺跡としての正確な広がりには残念ながら把握できない。しかし、東側は隣接する大川書店からも縄文土器の出土があり、かなり駅近くまで広がっている可能性が高い。そして、南側は雑道の道でかなりの段差が見られるので、おそらくそこが遺跡の限界と考えられる。また、西側は鴨立川で区切られるものと考えられる。学校内より土器が出ることは後述する沿革でもわかるとおり、かなり古くから知られていた。池田彦三郎氏も熱心に採集されている。

今沿革を挿入して記す。(第1図を参照)

1955年5月、水道拡張工事の際にJRのガード下より縄文土器と伸展葬の骨が出土(A)。

同年7月には学校敷地内鉄塔下より縄文土器・石器が出土(B)。

1958年11月、運動場の東北隅に防火用水槽を設置するに際し、多量の縄文土器が出土。また、鹿骨・貝殻・木の実等の自然遺物も出土している(C)。

1969年7月、校舎第1期工事の基礎工事に際し、土器が出土。しかし、これは北側の土砂を削って持ってきたものであり、元々この部分に存在したものでないことが判明している(D)。

1970年6月、第2期工事では縄文土器とともに貝類・魚骨の出土が見られ、配石遺構の存在も指摘されている(E)。

1971年6月、第3期工事に際しては地表下1.5mほどの所に包含層が存在することが判明している(F)。

1974年8月、体育館建設に際し正式に発掘調査が行われ、配石遺構・石囲い・築城葬の骨骨など多大な成果があげられている(G)。

1983年5月、大規模な増築が計画されたため、試掘調査が行われた。比較的浅い部分より竪穴住居址が検出された(H)。

1984年7月、試掘調査の結果に基づき第1次の本格的な調査が行われた。古墳時代から奈良・平安時代にかけての竪穴住居址及び皇朝十二銭が出土し、本道跡が複合遺跡であることが初めて確認された(I)。

1985年9月、第2次の調査が行われた。縄文時代後期の竪穴住居址、掘立柱建物址、縄文時代の注口土器(完形品)などが検出されている(J)。

1986年7月、第3次の調査が行われた。縄文時代後期の竪穴住居址が検出され、初めて縄文人の生活址の存在が確認された。また、配石遺構も発見されている(K)。

1989年1月、隣接する大川書店の店舗改装工事に際し、土器が出土。同年6月の調査の際には溝状遺構や土壌が検出されている(L)。

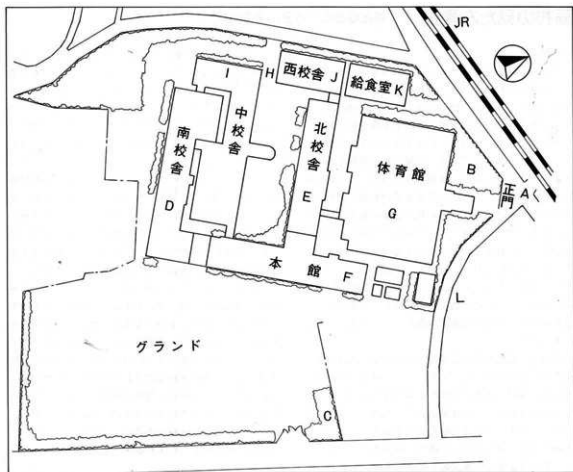
このように本道跡は過去において幾多の採集と発掘調査が行われているわけで、こうした成果をもとに時代別の遺跡の特徴を記しておきたい。

まず、本地点に人々がやってきたのは、縄文時代中期(今から4000年以上前)に遡る。その頃道跡付近は現在の海岸線のような感じで、砂浜であったらしく、土器はすべて砂層から出土している。明確な住居は発見されていないので、長期間生活を営む場所としてではなく、一定期間もしくは短期間海産物等を得る目的で生活したことが想定できる。そして、縄文後期になって初めて住居を構える。土器の量や獣骨・魚骨などから長期間暮らしたことが窺える。築城葬という全国的に見ても数少ない埋葬人骨が発見されていることも興味深い。

ところが、平穏に暮らしていた本道跡の縄文人達に急に異変が起きる。何が原因かは不明であるが、彼らは忽然と姿を消してしまうのである。次にこの土地に居を構えるのは古墳時代の人々である。その間約2000年、大磯小学校の敷地に人が住んだ形跡は残っていない。ある日突然、超自然現象が起こり不毛の土地となってしまったのか、序々に生活するには不適切な環境になっていったものか、俄に判別できないが、縄文人達はどこかへ去って行ったことだけは事実である。

次に生活を営む古墳時代後期の人々は、縄文人達の生活面よりも約1.2mほど上面に住居址を造っている。その内の1軒には縄文人達が好んで敷石や配石に使用した所謂「根府川石」が住居の中央にあった。付近より取ってきたものと推測される。奈良・平安時代の住居も高きには同様であり、1・2軒ではなく集落を構えている。そして、倉庫跡と考えられる掘立柱の建物址や皇朝十二銭である「神功開宝」などが出土していて、一般的集落とは様相を異にしている。

このように本道跡は、大磯町は勿論、湘南地域にとっても重要な遺跡で、今後順次資料の整理を行えば、もっと違った事実も浮き彫りになってくる可能性が高く感じられる。(当館 鈴木一男)



第1図 大磯小学校遺跡全体図(採集・調査地点)



奈良・平安時代の住居址(I)



縄文土器(J)

藤村の見た左義長 — 雑記帳をめぐる2、3の私見 —

はじめに

明治、大正、昭和にわたる近代日本文学の担い手として活躍した島崎藤村は、昭和18年、『東方の門』執筆半ばにして没した。終焉の地となった大磯には、晩年の2年余を過ごした居宅がそのまま残されており、簡素なたたずまいに藤村の信条を窺うことができる。

ところで、晩年に書き残した雑記帳が故郷の山口村馬籠にある藤村記念館に所蔵されている。この雑記帳には、昭和14年から17年に至るまでのものと昭和16年から18年にかけて書き留められた2冊がある^①。いずれも『東方の門』の創作ノートたるものである。前者の雑記帳には、軽易なスケッチとともに日常の出来事が悉かに記録されており、むしろ「日記」と呼ぶにふさわしい内容となっている。また、後者の雑記帳では「日記」としてしたためた数多くの材料を、創作に向けて整理構築した本来の意味での創作ノートと考えてよいであろう。

藤村は、昭和16年に大磯を訪れている。正月14日に行なわれる道祖神の祭りを見るのが目的であったがその後、藤村の求めにより町屋園と呼ばれる簡素な借家が用意された。当初は東京麹町と大磯との往復であったが、翌年8月には土地と家屋を購入し、いよいよ大磯の地で『東方の門』の構想と執筆に専心しはじめたことを考えると、雑記帳の大半は大磯を基盤として成り立っているものとみて差し支えない。大磯時代における藤村の足跡と、作品を生み出す藤村の思想性を知るには、たいへん貴重な存在となっている。

しかしながら、ここでは『東方の門』における雑記帳の持つ意義をとりあげようというのではない。この雑記帳を別な角度から細見しようというのである。つまり、こと細かに記述された日常見聞と、軽易ではあるが確実にポイントをおさえて描かれたスケッチは、大磯における当時の民俗事象を知る手がかりとして、我々に豊富な情報を提供してくれているという点である。

左義長という呼称

昭和32年、神奈川県無形民俗文化財として指定された道祖神の火祭りは、『大磯の左義長』として広くその名を知られているが、この左義長の名称についてかねてから釈然としなないものを感じていた。そもそも左義長という名称は、伊藤博文の關近によって使われ始められたと伝えるのが一般的な解釈となっている^②。しかし、永田衛吉氏によれば、このことが必ずしも、そ

れ以前に大磯で左義長の呼称が使われていなかったことの根拠にはならないとしており、県指定の際も左義長の名称を用いている。では、現在の呼び名はどうか。もちろん世代によって呼称に僅かずつの違いが見られるが、地元の年配者、特に司祭者に関して言えば左義長という言葉は知っていてもほとんど使うことはなく、依然としてセートパレー（サイトパレイ）という俚称が一般的である。むしろ「県指定無形民俗文化財の左義長」を周知したうえで、左義長とセートパレーの呼称を器用に使い分けるようにさえ感じられるのである。さて、藤村は雑記帳にこの祭りのことを「道祖神の祭」とともに「左義長」の名称をも記している。既に左義長の呼称が地元においてポピュラーに用いられていたものであろうか。しかし、藤村自身が既に知識として持っていたものか、あるいは大磯を訪れた藤村の案内にあたった人々、例えば菊池重三郎、天明愛吉、安田軒彦、中助助ら文化人の教示によるものであることも否定しえないのである。この祭りの傍観者が仮に左義長と呼んだとしても祭りの本質に何ら変わりはない。しかし、祭りの効用が、あくまで執行主体に対して還元されるべきものであると考えたとき、果たして左義長の呼称が本当にふさわしいものであったのか疑問が残る。いずれ賢明なる後見を待ちたい。

船山車とワラ人形

南下町、北下町という自治会組織を中心とするこの祭りは、実質的には7つのチョウナイ（町内）に分かれて執行されている。執行はそれぞれのチョウナイの世話人の手に委ねられており、行事内容も必ずしも一様ではない。ところで、藤村はどのチョウナイの祭りを見ていたのだろうか。雑記帳の記述とスケッチから探ってみようと思う。藤村は雑記帳のなかで双体の道祖神をスケッチしており、その道祖神の傍らに八大龍王の石祠や馬頭観音などがあるとしている。この記述から判断する限り浜之町と呼ばれるチョウナイの道祖神であるようだ。そして、次のような記述が続いている。

左義長の船

その支度 浪形 白朱色のいろどりなどあり

薬人形のせ 多勢 はだかにて町を引くともいふ
(ママ)

これによると、当時は船山車がつくられ、曳かれていたようである。船山車は、その年の干支にちなんで

作られた藁人形を乗せ、チョウナイを曳き回すのであるが、現在では全く行なわれていない。行なわれなくなってから既に久しく、聞き取りから判断すると戦前まで、早いチョウナイでは大正末～昭和初期には廃絶してしまったようだ。雑記帳には船山車のスケッチが描かれており、山車には浪模様をつけて青地に白や朱の彩色がなされていると注釈がつけられている。ただし、そこにはワラ人形は描かれておらず、藤村自身も実際に船山車が曳かれるのを見たわけではないようである。ワラ人形を船山車に乗せて曳き回す行事を行っていたのは浜之町、大泊、子の神であるが、藤村が記載したと思われる浜之町においては、既にこの時点でワラ人形の姿は見られなくなっていたと思われる。おそらく、ワラ人形が作られなくなった後も、船山車だけは引き続いて組み立てられていたのだろう。時代はくだるが、当館で所蔵する昭和30年頃のものと思われる写真にも船山車は見られるが、やはりワラ人形の姿はない。

ヤンナゴッコ

セートパレーには多くの行事が併合されている。ヤンナゴッコもそのひとつで、セート(サイト)の火が燃えさがる頃に、楯状の台に乗せた道祖神の仮宮を壊し海に引き入れ、更に浜方と圓方に分かれて綱を引く合行である。藤村もこの行事を目にしていたようである。ヤンナゴッコという名称こそ記されていないがその様子を書いていると思われる部分を抜粋する。

道祖神の石をわら藁につゝみ、ソリの
こときもののにせ、ハダカ(腹部を
白晒)若者寒いへと言ひ
ながら海へ引きゆく、投げ込み
海にはハダカのもの陸には着衣の
もの引き合ひ濱へあげる

まこもに包みたる道祖神の石のせしは海に引
き入れたる後、海のものに裸體、
磯にあるものは着衣のまゝにて
多勢よりて引き合ひ最後
(マツ)
に陸に引き上げる

この記述のなかで注意したいのは、道祖神の石を直接「わら藁」もしくは「まこも」に包んで海へ引き入れるという部分である。この「道祖神の石」が神像そ

のものを指しているのか、あるいはゴロ石と呼ばれる五輪塔の空・風輪に似た、真中のくびれた石のことなのか分からないが、藤村の見聞に間違いがないとすれば、現在の執行内容とはかなりの違いが見られる。

神奈川県内においては道祖神に覆い設けられたお仮屋をサイトの火に入れることは多い。また、道祖神の神体を直接燃え盛る火のなかへ投げ入れることもあるようだが、神体を海に引き入れる事例は知らない。もっとも、その意味というのはいずれも同義であろうがこれが事実ならば、大磯では従来、海に引き入れるのは道祖神の神体もしくは神体に見立てた石そのものであり、現在のような仮宮の形態になったのはその後ということになる。調査不足を恥じるが、今までのところ、残念ながら藤村の見聞の事実を裏付ける話は聞いていない。しかし、雑記帳におけるこの記述は昭和16年のことであるから、当時の様相を記憶する人はまだいる筈である。今後の課題としたい。

おわりに

藤村のように大磯に居を構えた作家群は多い。一定期間の滞在を含めれば、その人数はおそらく枚挙にいとまのないほどであろう。しかし、大磯が作品上に登場するのは必ずしも多くはない。藤村の遺稿「東方の門」は「近代日本における東西文化の融合」という骨子をもったものとして「夜明け前」を渡駕するような期待をもって受けとめられた。しかし、未完の大作として結果的に十分な評価を持つに至らなかったにしても、この大磯における見聞が作品の構想にかかわっていることは疑いない。もちろんそれは壮大な構想のなかでのごく一部であろうが、大磯の民俗と生活体験をどのような形で作品に昇華させていこうとしたのか、たいへん気になるところである。今更ながら未完が残念でならない。

(当館 佐川和裕)

一註一

- ①藤村全集第14巻 1967 筑摩書房
- ②口伝による。ただし、『大磯町文化史』1956大磯町教育委員会編によれば、「有名な某氏がこの祭りを見て左義長と言った事が名の起り」とあり、大正14年頃からのことだという。
- ③神奈川県民俗芸能誌 1987 神奈川県教育委員会
- ④原文では八天龍王となっているが、八天龍王の誤記ではないかと思われる。

【トピックス】

◇盛況だった子ども歴史教室

毎年開催している子ども歴史教室も本年で6回を迎え、小中学生30人(定員)の参加がありました。今回は「古墳時代を体験する！」をテーマにおこない、茅ヶ崎市教育委員会の大村浩司先生から古墳時代の説明を受けたあと、勾玉(まがたま)や管玉(くだたま)などの装飾品を粘土で作ったり、麻袋を利用して作



った貫頭衣(かんとうい)を身にまとって古代人の気分になりました。また、2日めには、秦野市桜土手古墳展示館に行き、古墳とその時代についていろいろと学習しました。来年も新しいテーマのもとに企画しますので、たくさんのお参加をお待ちしています。

◇丘陵を調べよう ①「セミのぬげから調査」終わる

参加約70名で、夏休み期間中にセミのぬげからを集めました。林による種構成の違いや、市街と丘陵との比較などについて調べることを目的としたもので、こ

の調査によっていくつかの新事実が分かりました。そ

れは、ヒグラシの大発生はスギ林だけではないこと、南方種のクマゼミのぬげがらが採集されたことです。特にクマゼミは、大磯町内各所で見つかり発生が確認されることが注目されます。今後、参加者と一緒に詳しいまとめを進めていきます。



◇博物館実習生来る

当館では、昨年度より博物館実習生を受け入れています。実習は大学において博物館学委員資格の取得を目的とした必須科目になっており、本年は5大学6名が実習をおこなっています。実習期間は1～2週間と短いですが、資料館での経験が今後の活動に活かされることを期待しています。

◇臨時休館のお知らせ

開館3周年記念特別展の準備と、常設展示室の一部展示替にともない、10月7日(月)～12日(土)まで臨時休館いたします。

【行事案内】

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。館へ直接お問い合わせください。

▼開館3周年記念特別展

「大磯と吉田茂」

10月13日(日)～11月10日(日)

戦後の復興に尽力した吉田。政治の舞台で活躍する一方、大磯の自然や動物をこよなく愛した人でした。今回の展示は、彼の人となりを中心に紹介します。

▼特別展記念講演会

11月3日(日・文化の日)午後1時30分～3時

講師 立教大学教授 北岡伸一氏

吉田茂の政治家としての業績を中心に講演いただきます。

▼自然観察会 (小学生以上 30名)

大磯で冬を越す野鳥基本20種について、その見分方に強くなりましょう。弁当・筆記用具を持参、ハイキングの服装で。大磯駅改札口に9時集合。

12月8日(日) 午前9時～午後3時

【資料の受入】

(寄贈) ご協力ありがとうございました。

大磯	森村春子氏	カンザシ他
大磯	松下イト氏	半端
高麗	小田島藤雄氏	絵はがき、古文書一括
東町	橘謙夫氏	古文書一括
西小磯	渡辺広平氏	古文書、典籍一括
西小磯	仲川英夫氏	消防道具
西小磯	鈴木惣一氏	ウナイグワ他
西小磯	鈴木輝海氏	醤油のシコミダル
国府新宿	飯田敏之氏	古写真
小田原	谷田部孝征氏	靴、鐙

(移管)

大磯町役場環境清掃課 絵はがき

(寄託)

大磯 宮代治吉氏 一本松講中資料一括

Report 一大磯町郷土資料館だより No.2

平成3年9月15日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255 神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463(61)4700

FAX 0463(61)4660